

# 斯道文庫の明日をめざして

斯道文庫長 山本英史

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫は本年2010年をもって創立50周年を迎えることになりました。私はこの記念すべき時において文庫長の任にあることを心から光栄に思います。

広く知られているように、斯道文庫は株式会社麻生商店社長でおられた麻生太賀吉氏が1938年に麻生商店創立20周年を記念して九州の福岡市内に設立された財団法人斯道文庫をその前身とし、その後幾多の経緯により慶應義塾に寄贈されたことから、1960年に大学の附属研究所として再出発したものです。

寄贈当初は7万冊だった蔵書も50年を経たいまでは16万3000冊と2倍以上に増え、日本でも有数の東洋古典籍図書館として内外の需要に資するまでに発展するようになりました。また近年では財団法人センチュリー文化財団から慶應義塾創立150年を記念して所蔵美術品1740点、古典籍15000冊の寄託を受け、文字文化に関する資料が飛躍的に充実するようになりました。加えて「斯道文庫論集」の公刊を通じての研究成果の公表を筆頭に、外部研究プロジェクトへの参加、毎年開催される斯道文庫講演会の実施、書誌学の後継者養成を目的とした大学院生対象の斯道文庫書誌学講座の担当など、研究・教育における研究員の外に向けた活躍も顕著となるに至りました。これもひとえにこれまで斯道文庫を支えていただき、斯道文庫のために御尽力いただいた関係皆様様の御蔭と深く感謝申し上げます。次第です。

ところで、中国大陸や台湾の大学のカリキュラムを見るにつけて痛感することは、前近代の中国文学や中国史関係の講座が少なくなく、さらに書誌学関係の教授陣も充実していることです。その理由を尋ねると、「それが私たちの文化なのです」という答えが必ず返ってきます。翻って昨今の日本はどうでしょうか。研究の重点はいずれも近現代に偏重し、高校の授業の少なさにも影響して古典籍に興味を示す学生の減少が目立ちます。やはりこれも“文化”の問題であり、日本の明日に関わる問題ともいえるでしょう。そういった意味でも斯道文庫はその“文化”の前衛たるべく、今後とも研鑽に努めねばならないと切実に思うものです。